

顧問の藤井亜紀子がコートに現れた。亜紀子も慶子と同じようにコートわきで着替え始めた。グレーのタイトスカートを脱ぐと、陰毛に飾られた下半身が見えた。慶子同様に、下着を穿いていなかった。スカートは慶子と同じように短く、尻肉さえ覗けてしまう。

26歳の女性のむっちりとした太腿が、スカートから生々しく露出している。

顧問教師と部長とのレズ関係を美樹に知られてしまい、それ以来、美樹のいいなりになっているのだ。

「先生、遅かったじゃない」

美樹が口を尖らせながら言った。

「ご、ごめんなさい…会議があったものだから……」

「いいわけはいいです。それより遅刻した罰は何でしたか？」

「は、はい…遅刻の罰は、女教師のお尻叩きです。生徒の皆様、よろしくお願ひします」

顧問女教師の亜紀子は、テニス部員たちの前でスカートを

腰までまくり上げ、眩いばかりに白いむきだしの尻を突き出した。

「遅れて申し訳ありません、お仕置きをお願いします」

媚びるように女教師は、丸く張った双臀を左右に振った。

まずはじめに、美樹が尻を叩いた。成熟した女性のむっちりとした尻肉に美樹の手形がくっきりとついた。数回叩くと次の部員に替わった。全員が叩き終わると休憩となった。

「慶子、いつものように先生とレズってみなさいよ」

木陰のベンチに腰掛けた美樹が、顧問教師とレズることを慶子に命じた。サーブの的になった後、ずっとコートの中を走るように命じられていた慶子は、美樹のそばに走り寄った。汗でびっしょりになっている慶子のシャツは身体に張り付いて、乳房がくっきりと透けて見えていた。

バイブを入れられたままになっている膣がひどく痛い。

長時間入れられたままになっているため、粘膜は爛れ、腫れているのだ。そんな状態で走るように命じられて慶子はふらふらになっていた。夢遊病者のように亜紀子に近づく

と、ためらうことなく唇を重ねていった。濃厚なキスを交わす女教師と部長を部員達が囲んだ。慶子が亜紀子のシャツを脱がせた。慶子の汗で張り付いたシャツを亜紀子がもどかしそうに脱がせた。亜紀子の成熟した乳房が、まだ固さの残る慶子の乳房と重なり合った。下半身にも互いに指をしのばせてまさぐった。慶子の膣に入れられているバイブが振動し始めた。木陰のベンチで見物している美樹がスイッチを入れたのだ。慶子の身体がびくっとうごめき、女教師とのキスがもっと積極的になる。振動するバイブを女教師の股間にこすりつけるようにしながら、喘ぎ声を高くしていくのだ。全裸の慶子と亜紀子は、恥ずかしいレズ行為をテニスコート上で晒し続けた。アクメを迎えると部員たちから哄笑が漏れる。

「ふふふ、こんな所でいっちゃうなんてはしたないわね」

「発情した牝犬みたいだわ」

「牝犬というより、牝豚みたいじゃない？二人のあの顔、まったくいやらしいわ。よだれまでたらしているじゃない

の」

「それじゃあ、練習を始めるわよ」

ベンチから立ち上がった副部長の美樹が号令をかけた。レズ行為を強要され、アクメの余韻に浸っていた慶子と亜紀子は、のそっと立ち上がると、スカートとシャツを着た。

「二人とも外を走ってきなさい。そうね、今日は校舎の周りを二十周よ」

美樹に命令された二人は、テニス部の練習場から出て、外を走らなければならない。それも校舎の周りを走るのだ。当然、他の生徒たちや教師の視線を浴びることになる。

「牝豚ちゃんたち、早く行きなさい！」

部員の一人が亜紀子の臀部をテニスシューズの先で蹴り上げた。もう一人が慶子の双臀を蹴った。二人は走り始めた。